

『語りの廻廊―「聴き耳」の五十年―』

高塚 さより

1 昔話を聴く営み

昔話を聴くという営みは、こんなにも人間の声と生き様に迫り、鮮やかに浮き彫りにすることが出来るものだったのか、その営みの重みと意義について強く実感させられた。

著者、野村敬子氏は山形県真室川町に生まれ、國學院大學で白田甚五郎氏に師事した。大学卒業後は、志を同じくする夫・野村純一氏と共同研究に取り組み、家庭人や女性の立場・視点から研究を展開していく。本書には、著者が五十年という営みにおいて出会った人々、耳を傾けてきた語りが、口承文芸研究者の眼差しにより人間の生き証として綴られており、そこには著者の研究の歩みと生き様が投影されている。

2 「声の文芸」を求めて

本書は、まず、著者自身が学生であった昭和三十三年に体験した昔話探訪とその録音記録を述べることからはじまる。再生され甦った声。宝物のように扱われた録音機を前に、話者も聴き手も緊張していた。著者は聴き手の一人として後方で息を潜めていた。その再生された記録について、著者は「口承文芸学の研究史からは「語り手の言葉を声の実態として」「聴き手」の「聴き耳」で顕在化した最初の記録と位置づけることができよう。私がこの探訪に参加していた傍は計り知れないのであった。」と振り返っている。録音という技術が口承文芸研究に与えた影響は大きく、研究史を考える上でも不可欠な問題である。著者の口承文芸研究が、そのスタートにおいて、録音と

いう方法が活用されはじめた時期と重なっていることの意味は大きく、著者にとつては以後の方向性を左右する口承文芸研究の原点ともいえる体験だったのかもしれない。そして著者は、語り手の言葉、語りを、声の実態、人間の生の証として、聴き手の聴き耳で顕在化していく営みを歩み出す。

著者は、昔話を聴くことへの強い思いと共に、口承文芸研究史における自らの研究姿勢を明確にしている。それは本書を貫くテーマにもなっており、凡そ次の四点にまとめられる。一つ目は、「口承文芸を「声の文芸」「対面文芸」の基軸に据える」という考え方である。その背景には、「語り手」「声」不在の昔話研究に対する疑問と、師・白田甚五郎氏が説かれた実感実証の学び―「語り手」を訪ね「聴き手」として魂のふれあう人間関係なしに、昔話の研究は成しえないという教え―への賛同の精神がある。そして、「私の実感実証はまず「語り手」発見に情熱を注ぐことからはじまった」と述べる著者の研究は、常に、生身の人間の存在を強く意識し、人間一人一人と対峙する

ことが基底にある。口承文芸研究という方法で人間の存在と生き様に迫るには「語り手」「聴き手」「声」への視点は不可欠であった。つまりは「声の文芸」「対面文芸」としての口承文芸である。二つ目は、「昔話の語り言葉について、生まれ育った土地の伝承言語を第一義としている」点である。これは、単に伝統的な昔話の語り口、形式面からの関心だけではない。定型化された昔話の語りに、語り手個人、一人の人間としての声を聴き、そこに込められた「より深い真情の濃やかさ」を理解したいという考え方によるものだ。「生活語としての伝承言語」だからこそより強く深く表れる、生きる表現力と力強いメッセージをみようとしたのである。三つ目は、定位置探訪という方法、その対象を自身の出身地真室川町を含む山形県北地方に設定していることである。著者が真室川という昔話伝承の濃厚な地に生まれ育ったことは、著者の口承文芸研究に少なからず影響を及ぼしていると思われるが、真室川を特別な探訪地としたのは、昔話の伝承が豊富であるからだけ

ではないだろう。やはり、一人の人間としての語り手、さらには人間の生きた証として「声の文芸」を追い求める姿勢が、自ら

が生まれ育ち、生活空間と生活語を共有してきた、真室川という地に向かわせたのではないか。この定位置探訪という方法は、真室川に生きた人々の語りと生き様だけでなく、真室川という地域の歴史、或いは、真室川における口承文芸の伝承世界を描くことも成功している。一方で、真室川以外の語り手、事例もあり、著者の研究の歩みと共に出会った語り手の広がりを見ることが出来る。四つ目が「男語り・女語り」である。本書の語り手たちは、男性或いは女性という各々の性を背負い、その人生が時として性差によって定められる時代を生き

て、その背景にある歴史や時代認識を問うとしている。

3 本書の構成と内容
本書の構成は次の通りである。

はじめに

I 男語り

一 僧侶の口演童話―鮭延瑞鳳師

二 修験影響下の語り手―富樫豊さん

三 オンズ・四男の夢語り―国鉄駅前の語り手 近岡富治

四 ますらたけおの昔話―ジャングルの語り手 新田小太郎さん

五 三男坊の昔話―今義孝さんの伝承世界

六 書承昔話の可能性―外吉から小太郎へ

II 女語り

一 姉家督当主の伝承―土田アサヨ女・マサエ女の語り

二 家の霊性語り―長女マツ女から嫁クラ夫人へ

三 「口語り」―前新トヨさんの語り

四 出産の場と昔話の語り手―富樫イネさんの場合

代においても、男性、女性であるが故の運命や苦悩など、性差が生み出す固有の問題も少なくない。著者は、人間が生きていく上で不可避な問題の一つとして性差の視座を用意し、そこから生れる語りを「男語り・女語り」と位置づけることで、語りを通して

五 「ふるさと創生昔話」の語り手―高橋シゲ子さん

六 外国人花嫁の語り―山形のおかあさん・オリブさん

七 「多国籍社会日本」の昔話―金基英さんの語り

III 語り手へのまなざし

一 昔話の語り手あとがき、初出一覧

構成上の特徴の一つが、「男語り」「女語り」として、語り手の性差を意識化していることである。「男語り」では、新憲法発布の昭和二十二年までは男性固有の世界があったことを「話し語りの声の領域」からみようとしている。女性を遮断する男性の宗教世界や徴兵制度など、男性固有の世界や精神を、男尊女卑で片付けずに、男性に生まれた故に定められた運命、男性故に不可避な生き方を強いられたのかも知れない領分として捉えようとした点が興味深い。「男語り」の中で、男性という性を生きた人間と時代を見つめる著者の眼差しは深く、投げ掛けた問題は大きい。「女語り」

では、女性のアイデンティティ、女性独自の世界を語りの世界に見ようとする。それぞれの時代と社会の中で女性という性を生きた人々を見つめ、その語りから女性という性を追及している。また、同じ女性として共感できる心の動き、女性の持つ超自然的な力の感覚、女性が生きていく上で抱えざるをえない問題など、女性としての当事者の視点を交えながら論じている。構成上のもう一つの特徴として、語り手ごとの章立てと「III語り手へのまなざし」がある。著者の「語り手」への視座は、多くの昔話を語る人としてというだけではない。「生きる」表現力が「語ること」であり、語り手一人一人の声、豊かな語りの表現と力に人間の生きる証をみようとした、著者の信念と研究姿勢に基づく構成である。「私の実感実証はまず「語り手」発見に情熱を注ぐことからはじまった。感性豊かな声の表現領域で優れて見事な語り手たちと、いろいろな出会いに結ばれてきた。」その結果が示されている。次に目次だが、一瞥するだけで「口演童話」「国鉄駅前の語り手」

「三男坊の昔話」「ジャングルの語り手」「書承昔話」「口語り」「外国人花嫁」などの刺激的な言葉が目に入ってくる。これらは、口承文芸研究或いは民俗学において必ずしも積極的に取り上げられてきたとは言えない領域である。著者のこうした研究の方向性は、どの程度意図的なのかは別にして、前述してきたような著者独自の研究姿勢や「語り手」「声」に対する独自の認識からきていると言えよう。終章の「語り手へのまなざし」では、これまでの語り手研究の成果を踏まえつつ、何故、人々は昔話を語る必要があったのかを改めて問う。そして著者の「昔話研究とは聴き耳に享受した昔話の運命を、語り手と共有する責任があることを肝に命じている」という発言は、口承文芸研究者への強いメッセージでもある。著者がどのような出会いを重ねてきたのか、以下、その聴き耳による「語り手の廻廊」の世界をめぐってみたい。「僧侶の口演童話」では、真室川地域の口承文芸の伝承に学校の実演童話や口演童話が深く関わり、その形成には一人の僧侶の存在があったことを

説く。僧侶瑞鳳師が、学校教育・標準語への疑問を感じていた最中に柳田國男氏の提唱に心を動かし、「人間の心に向けた童話活動」、「生活から生まれた方言による昔話」に注目するようになっていった過程を明らかにした。口演童話と口承文芸、方言による昔話の意義を説いた点が興味深い。「修験影響下の語り手」は、富樫豊氏の語りのルーツと特徴に、生家と父親の生き様を重ねて検証している。「オンズ・四男の夢語り」は、農家の四男坊が、国鉄の駅前空間という場で、自らの生活空間＝居場所と語りを育んできた半生を考察した。駅という場への着眼、著者自身の父親を語り手として対象化している点が斬新である。「ますらたけおの昔話」では、戦場における語りを取り上げる。戦場という、人間の生が極限状態にまで追い込まれる、一見昔話などとは遠い世界と思われる場の語りには、自分が言葉を発することで生きる実感を回復する人間の姿があった。それは民俗社会におけるトギの心意に重なるものでもあった。著者は「言葉が紡ぐ戦争を意識化する営み」と向き

合う中で「男性集団が経験した、言葉をめぐる特異な昭和史」はまだ説明されていないと訴える。戦争という問題に対して、口承文芸研究、民俗学がまだ多くの課題を残したままであることをつきつけている。「三男坊の昔話」の語り手今義孝氏は、「ますらたけおの昔話」の新田小太郎氏と共に戦場での語りを経験した戦友である。長男の新田氏に対して三男坊の今氏の昔話は、三男の人生を反映させた顕著な特性がある。祖母から聞いた昔話は単なる昔話の伝承体験ではなく、祖母との密接な人間関係を伴うものであった。戦場での生死を賭けた決断にも祖母との昔話伝承体験があった。また、著者自身が戦争体験を聞かされて成長した経験から、軍隊特有の話群や口承世界の戦争についても言及している。これもまた今後の口承文芸研究における課題の一つである。「書承昔話の可能性」は、人間の持つ昔話の継承に対する厳しく激しい思いを取り上げつつ、昔話の資料化の孕む問題や可能性についても論じている。「人にとっての昔話とは、自己の存在証明としての心的な

地平に根ざす、不思議で矛盾に満ちた文芸活動である」という著者の言葉が印象的である。「姉家督当主の伝承」は姉家督という民俗を口承文芸の視点から捉える。家の繁栄に繋がる昔話は語られるべくして語られ、家を継いだリーダーの気概が家と昔話の伝承の鍵を握っていると指摘する。「家の霊性語り」は先人研究者の軌跡をニュータウンに追う。「姉家督相続者の家系伝承の継承管理権」に繋がる問題、女性伝承における霊性、巫女性について踏み込んでいる。「口語り」は、「女が女の血で継ぐ超自然」が日常との関わりで語られる様を明らかにする。女性研究者として、女性の持つ特性と語りの世界を対象化している。著者自身の思考のプロセスやこれまでの研究の枠では論じきれない面なども吐露され、問題の深さが窺える。「口語り」という視座が伝承言語の根源的な問題を内包していることを提示し、「聴くこと」の意義を自身に問うている。「出産の場と昔話の語り手」では、産婆の語りを伝承する富樫イネ氏の語りを通して、出産の場における語りと語り手の機能について

考察している。富樫イネ氏は、男語りで論じた修験影響下の語り手富樫豊氏の姉にあたり、「神様ムガシ」を男女という性の側面から捉えた形にもなっている。「ふるさと創生昔話」の語り手では、「ふるさと伝承館」という場での昔話伝承について取り上げる。自発的語り手、家の中だけでは完結しない語り、「家」から疎外された女性たちの語りなど、口承文芸や民俗学が対象外としてきた側面にアプローチしている。そして、そうした語り手の中の一人である高橋シゲ子氏を「ふるさと創生昔話の語り手」として位置付け、その語りに無償の愛が宿ることを明らかにする。「外国人花嫁の語り」は、外国人花嫁という存在、それらが抱える社会的或いは個人的問題に迫る。著者は、アジア人花嫁の子育てを巡る問題として、語りの側面からの接近を試みたと述べている。著者自身、外国人花嫁の伝承に自覚的に加担しつつ、研究者としての目線を確保しながら論じている。自らの語りが文字化された民話絵本を前に、母国の民話を子供に伝えたいという思いを膨らませ、母国の民話

を生きるために体得した農家の花嫁言葉で綴っていく外国人花嫁。そうした一人の女性の姿を見守る著者がいる。著者はさらに、外国人花嫁オリブ氏の語りの行く末、国際化、国際結婚、外国人花嫁の抱える課題を見据えようとしている。「多国籍社会日本」の昔話は、国際結婚が増徴する中で、子産み子育ての母の昔話新時代到来を指摘している。アジアと日本の間に横たわる歴史の溝は消し難く、口承文芸の世界にもその苦渋がにじみ出ているが、その一方で多国籍語りという可能性も秘めていることを主張する。そして多国籍昔話を語り聴く営みは「世界性」の認識と「感動の法則」を見出す営みでもあると結ぶ。

4 人間の存在を証すものとして

本書には「聴き耳」実践の五十年が凝縮されている。そこには「人間の存在を証すものとして昔話を聴いている」という著者の思いと覚悟によって浮き彫りにされた人間の姿と語りがあり、「自分らしい生を貫く方々のメッセージ」が伝わってくる。ま

た、時代の問題点を鋭く見抜く著者の眼差しと感性が、「個」の生き様と語りを通して、時代と地域のあり様や闇の部分をも照射する。著者固有の聴き耳による実践・研究は、人間の生き様を証すが、著者自身の生き様でもあり、「口承文芸研究」には収まりきらないとすら感じる。そこにはフィールドワークの真髓がある。著者は繰り返し、昔話や語りが人間にとつて生きる証であることに迫り、昔話を語り聴き、伝えていく意義、口承文芸研究の意義を問う。研究者という聞き手・聴き耳であることを自覚しつつ、一人の人間として様々な人間との出会いを積み重ね、その声を聴く中で育まれてきた姿勢であろう。著者、野村敬子氏の「人間の存在を証かすものとしての昔話研究」は、「口承」という視座や民俗学という方法の持つ可能性、口承文芸研究の意義やあり方を問い直し、口承文芸研究・民俗学等の成果や枠組みを越える可能性を秘めている。

(二〇〇八年十月、瑞木書房、本体三五〇〇円)

(たかつかさより／江東区深川江戸資料館)